

## 小竹英夫『柏倉忠肅とその周辺』

柏倉忠肅は、幕末に箱館病院の五人の頭取のうちの一人として名声の高い医師であったが、開拓使設置後の明治二年十一月には、函館病院付属幌泉詰として同地に赴任したが、明治五年に札幌に移り、翌六年には官を辞し、札幌の開業医第一号といわれている人物である。明治十二年八月に死没しているので、開業はそう長くなかった。現在札幌市東本願寺墓地に柏倉忠肅の墓が残っている。

柏倉忠肅が札幌で開業していたことは、北海道の医史研究の先達者である関場不二彦博士の『札幌医事沿革史』(「関場理堂選集」所収)に収められている。小竹英夫氏はこの選集の編輯者の一人であった。

小竹英夫氏は明治四十三年札幌で出生、昭和九年北大医学部を卒業された。私の一年先輩である。通算七年の軍務ののち、北大付属医学専門部教授、国立旭川病院長を経て、昭和二十五年から同四十九年の間、札幌市で内科・小児科病院を営み、その間札幌市医師会理事、北海道医師会常任理事を共にほぼ十年間勤めておられる。その間北海道医師会史の編集長として、膨大な会史を作られたが、これは小竹氏の功績と高く評価されている。

小竹氏は北海道医師会で発行している「北海道医報」の昭和三十七年三月から『医事・文談』の題名で医人、医学、医

療について執筆されたのをまとめて昭和五十六年に出版され、更に昭和四十四年から五十二年までの発表を『続医事・文談』として昭和五十八年に出版しておられる。この度は更に「北海道医報」に一〇三回に涉って連載された柏倉忠肅とその家系についての調査された成果を出版されたのである。

今度の小竹氏の著書は明治生まれの小竹先生のあくなき調査の努力と見識が感じられることから、これからの医史研究者に研究の仕方を教えてくれる見本の著述であると私は感じている。

北海道の医史学研究はやっと拡大して、札幌においても若い研究者が集っての研究が始っており、既に『蝦夷地の医療』という論文集が出版されており、小竹氏はこのグループの相談役として指導に当たっておられることを付記しておく。

(渡辺左武郎)

〔北海道出版企画センター、札幌市北区北十八条西六丁目二〇、  
☎〇一一・七三七・一七五五、B5判五四八頁、一九九二年一  
二月刊、四二〇〇円〕